

最期の時とお迎え現象

死を目前にした時、日本人は昔から「そろそろお迎えが来る」という言い方をしてきました。すでに亡くなつた人たちが、これから亡くなるうとしている人を迎えてくれるのです。

それは連れ合いかもしれないし、あるいはこれまで出会ったこともないご先祖様かもしれません。とにかく誰かが迎えてくれて、あの世へと連れていくつてくれるのです。科学的に証明することなどできませんが、それが存在しないということもまた証明できないのですから、死後の世界をわざわざ疑う必要もないのです。

この「お迎え現象」ですが、これは医師としても経験するところです。終末期、つまりもう助からない状況の患者さんが自然な看取りを希望されて、それを迎える時に、不思議な現象を目にすることがあります。

亡くなる少し前に、その患者さんの顔が少々ほころぶことがわかるのです。おそらくすでに意識はないのでしょうか。家族や医師が声をかけてもわからない状態です。二、三日前までは苦痛に顔をゆがめていたのに、ある時から苦しい表情を見せなくなります。そして時折、にっこりと笑っているかのような表情を見せるので、私は経験から、死期がもうそこに迫っていることを感じ取ります。

そうしていざ最期を迎えるとした時、患者さんは表情を変えます。その表情を見ていると、そこには苦しさや無念さなどは見て取れません。恐怖を感じているでもなく、何かに驚いているような表情をします。視線が一つの場所に定まって、「えっ!」というような顔をされます。明らかに何かに驚いている様子なのです。残念ながらその後には逝つてしまわれますので、何に驚かれたのかを聞くことはできません。

でも私はそんな患者さんの表情を見るたびに、お迎えがやつて来たことを確信しているのです。先立つている家族が迎えてくれて、「もうそろそろ